

高畠藍泉の作風形成

——「梅柳新話」を巡って——

明治十一年七月、高畠藍泉は三ヶ月弱の大阪滞在より帰京した。その間の動向は既に拙稿にて明らかにしている。⁽¹⁾ 本稿は上京後初の連載となる「梅柳新話」を分析し、藍泉の新しい主題形成の跡を辿りつつ、同作単行本「梅柳春雨譚」後篇の刊行が遅れた理由、更に次作において、分冊から合本形式の単行本化へと大きく変化した理由も併せて指摘する。

一 藍泉と「梅柳新話」について

藍泉は在阪中「大阪」新聞に「五月雨物語」の連載を十回で完結させ帰京する。一ヵ月後大阪の石川和助が摺付表紙に本文活字版の上中下三冊という体裁で単行本化する。藍泉は初の連載を体験したうえ無難にこなした。加えて単行本にすると、もう一つの売物になるとも実感した。従って東京に帰った後も、連載という商品に魅力を感じ続けていたことであろう。一方、業の業界紙として創刊された「芳譚雑誌」も不振を挽回するべく文芸欄の強化に乗り出していた。両者の思惑は一致し、藍泉は帰京三ヶ月後と

佐々木 亨

なる十月十一日「芳譚雑誌」二十一号に「梅柳新話」の連載を開始した。転々堂主人という御馴染みのペンネームで長丁場に挑むこととなる。筆者は連載を十五号まで確認しており、毎回挿絵付きである。これは単行本全体の四分の三程の分量に相当し、そこから推して二十回以上の連載回数に及んでいたはずである。

興津要氏は「転換期の文学」において本作を「巷説兎手柏」や「松之花娘庭訓」と同様、激動期に於ける人生の浮沈という主題を持つ作であると位置付けつつ、次のように述べている。

藍泉としては、はじめての作品らしい作品であるため、お柳などまったくえがけず、「学事を励ます捷徑に。勸懲の理を説諭さん」(序)との意図も十分には表現されず、描写も文章もさわだつたものはみられない。しかし同時代の毒婦物が、事実性をうたいながら、善玉悪玉交錯する芝居がかったストーリーを展開したのにくらべると、筋も比較的自然で、しいて悪玉善玉を設定しなかったのはやはり藍泉のあたらしさでもあった。

同氏は、必ずしも高い評価を与えてはいないようである。これは単行本化された「梅柳春雨譚」のみを対象とした結果と思われる。実は連載「梅柳新話」と単行本「梅柳春雨譚」では本文の書き換え、及び省略がかなり行われている。後述する如く、興津氏も引いた序文の意図も連載ではいまだ筆が費やされていたのであった。「巷説兎手柏」をはじめ藍泉の単行本は、連載をほぼそのまま流用しているという前提で語られてきている。実はそれは「梅柳春雨譚」の次に単行本化される明治十五年刊の「岡山紀聞筆之命毛」からなのである。この点に関しては後に詳述する。また、作品自体の完成度と作者にとつての重要性とは必ずしも一致するものではない。従つて連載と単行本との本文比較という作業を経つつ、作品の再評価を試みる。

単行本の梗概は既に興津氏が紹介しているが、それとの違いを示すべく以下管見に及んだ連載十五号までの梗概を紹介する。

浅草仲町の裕福な古着商大阪屋四郎治は、律儀な清三郎と色氣づくお梅と二人の子がいる。お梅は声色使いの揚助に思いを寄せ、下女の手引きで結ばれる。清三郎はお梅の遊蕩を戒めるよう父に依頼するが、清三郎は四郎治の兄の子であり、実子のお梅に嫉妬していると誤解される。清三郎も遊蕩に走り二百両を使い込み勘当の果て京都へ落ちていく。もと大坂屋で飯炊き奉公していた得蔵は清三郎を救い、使い込んだ金を用立て江戸へ帰るよう勧める。清三郎は大阪で両替をした折、これが盗まれた金と判明し捕えられ、得蔵を庇うべく虚偽の犯行を自白する。お梅が揚助と密会を楽しんでいると四郎治危篤の報が入り、慌しく帰るも間に

合わなかった。やがて店は破産し、お梅は母お筆と借家に住まい、お筆は病となる。お梅は揚助が捕縛されたと聞き、止む無く糸屋右衛門の妾になり、母とともに妾宅に住まう。一方清三郎は覚悟を決め、放免される三吉に得蔵への言伝を託す。三吉は清三郎が処刑されたと思い込み、得蔵に伝える。得蔵は清三郎の心情を察し、遺体を受け取るべく急いで役所へ向う。お梅が伝右衛門と外出した折、放免となった揚助はこれを見掛け、その跡をつける。妾宅へ乗り込む揚助に対し、お筆は金を握らせて帰す。翌日お梅は揚助と再会しこれまでのいきさつを語り合い、二人は楽しい。お梅と揚助が密会することを伝右衛門も気付き、家を与えて縁を切る。同居する二人は博打の負けが続き、借家住まいに転落する。やがてお筆は病死し、更に二人は負債を重ねて夜逃げする。しかし神奈川の宿で揚助は病に倒れ、金に困つたお梅は英国人の妾となる。一方清三郎は得蔵の証言で放免となる。二百両は得蔵の娘お柳を売って用立てたものである。

連載で確認できたのはここまでである。以下興津氏と重なる部分もあるものの、同氏の紹介されない、問題となる箇所を加えて単行本による梗概を掲げる。

金を盗んだ犯人は両替屋の息子であった。清三郎はお柳を身請けして婚礼を挙げる。暫く体を休めた後、得蔵とお柳を伴い上京し、義母と妹の行方を捜す。清三郎は、横浜の遊郭でお梅らしき遊女が梅毒で苦しむ姿を見る。得蔵が確認に行くと、お梅は揚助と逃走していた。上方に戻り大坂屋を再興するも軌道に乗らない。明治十一年再び妹捜しに単身上京する。途中の船中で御用商

人の山田義兵衛と親しくなる。上京後父の墓参に行くとお梅が自殺するところで、これを救う。揚助が死亡したのち地獄屋に拾われ、警察の手入れに際し逃げ出したのであった。そこへ山田が入りの高官湊野寛を伴い来る。湊野は清三郎の実母の異母兄弟で、捜していた姉の墓がわかりその息子にも会えたと喜ぶ。清三郎には東京で御用向きの店を構えさせ、お梅は入院させた。

連載と単行本の違いの問題は次章に回し、まず典拠の存在について述べたい。既に指摘したように、それは「大阪」連載の「霜の曙」である。拙稿では両者の前半における筋の一致を確認した。本稿では主に後半の創作に関して考察する。まず典拠の紹介を簡潔にしておく。「霜の曙」は「大阪」紙上九月十九日から十月十九日までの一ヶ月、十八回にわたり連載された。対して「梅柳新話」は十月十一日の連載開始である。「霜の曙」は記者の署名がない。「大阪」紙上において、特別の寄稿者がいる場合はその人物名を掲げる。署名なしの記事は、当時の記者の少なさから推して編集責任者である宇田川文海が関わっている場合が多い。従って「霜の曙」も文海の関与を認めて然るべきと思われる。挿絵は第四・十・十二回に置かれている。このうち藍泉が採り入れたと思われるのは、第十二回で、妾となったお梅を出所した恋人が見付けて、尾行する場面である。さて筋の一致する箇所とそうではない箇所を明らかにするべく、煩雑を厭わず以下「霜の曙」梗概を示す。

大坂佐野屋橋に大店を構える尾張屋利兵衛の娘お梅は、門芝居の芸人菊次郎のとりことなり、下女の仲介で密会を果たす。尾張

屋の長男利三郎は、妹お梅の遊芸が過ぎると父に忠告を促すが耳を貸してもらえず、立腹して道楽者となる。お梅は菊次郎と有馬温泉へ出かけるが、母お時より父危篤の報が入り、急ぎ帰るも翌日死別する。店は破産し母子三人借家住まいとなる。菊次郎は賭博がもとで捕縛され、お梅は心穏やかでない。利三郎は借金を残し江戸へ逃走する。借金催促に苦しめられたお時は病に倒れ、お梅は米相場師長浜善右衛門の困い者となり、家をあてがわれる。そこへ菊次郎が現れ、お時は金を握らせ引き取らせる。善右衛門に対しお梅は度々無心した結果、仕送りは絶え、お時は病死する。お梅と菊次郎は散財の限りを尽くし、善右衛門から手切れ金をせしめる。遊び歩きの果て、敦賀でお梅は遊女となり菊次郎に貢ぐ。しかし菊次郎は喧嘩の果てに落命し、客を取らなくなったお梅は伊勢の遊郭へ売られる。一方、江戸へ夜逃げした利三郎は改心し、商売に励み独立を許され財をなす。大坂で母と妹を捜すべく、商品の仕入れも兼ねて帰郷する。途中伊勢に泊まった際、祭りの行列の中にお梅を見つけ、身請けして大坂に帰り親類を廻る。そして宮津へ向って行った。

以上の梗概によって明らかのように、前半の筋はほぼそっくりで、舞台を上方から江戸へと置き換えたに過ぎない。主人公の名前もお梅は同一、利三郎を清三郎と一字改めただけである。更正した兄が墮落した妹を救う結びも一致している。のみならず、本文の字句を借用あるいは参照している場合さえもある。

つい三ヶ月前ものした、藍泉にとつて連載第一作の「五月雨物語」も、その第一回に「蓼花庵主人が此頃き、得たる一奇談の原

稿を本社に寄せられたり」とあり、新聞社に提供された原稿が存在した。更に続けて「記者文海子が煩雜の間に編も煩らはしとて子に托されたり」と藍泉が記す如く、文海から提供された粉本を基に書き改めたものだった。今回もそれと基本的に同様の執筆方法であるといつてよいからと思われる。まず文海による「大阪」紙上連載の情報提供を受ける。東京では大阪の新聞があまり出回っていないかったという事情が背景にあるのだろう。「曙」新聞に再び職を得た藍泉が、記者の片手間に引き受けた仕事にすぎなかった。前半に一致する部分が多いことが、それを物語っている。

しかし後半に進むに従って筋が異なってくる。男女の各主人公の行動の違いが顕著に認められるのである。まず女主人公のお梅の方から見ていこう。典拠においてお梅の記述の分量は多く割かれ、主人公といつて然るべきであり、タイトルの角書もそれを証明しているよう。しかし藍泉は母の死の場面において、典拠のうぶな娘を不孝者へと書き改め、場面が進むとより奔放な女に書き変えていく。その行き着く先は、遊郭に売られ梅毒に冒され髪も抜け客が寄り付かないと典拠の華やかさを微塵も残さない。更に夜鷹に身を落とし、警察の手入れをやつと逃れ、茫然自失の態で自殺の現場へと創作を加えている。典拠の最終回ではいたずらに淫奔になる娘本人へ、そしてその父母への戒めとして結んでいた。一方藍泉は連載十四回において批評を挿入し、妾となる前、お梅が援助と恋仲であった点に関しては「其情細密なるも未だ人倫の道を欠くに至らず」と恋の情には寛容であり、妾となつたお梅が旦那を裏切り不義に走つたことを「廉恥を破り節義を漫り食りて

飽くことなく」と非難し、その報いとして惨めな末路を用意している。単行本化に際してはこの批評は省略されている。興津氏は序の「勸懲の理を説諭さん」という意図が十分には表現されずとしたいが、典拠との比較、及び後述する単行本化に際して切り捨てられた部分から藍泉の意図がある程度は汲み取ることができると思う。

お梅の後半生以上に改めたのが、男主人公の清三郎である。原拠では影が薄く、お梅を救うべく終盤現れたに過ぎない。それを激動の時代を生き抜いた、文字通りの主人公に作り変えたのである。藍泉は一体何を基にしてその操作を行なつたのであろうか。男主人公に創作された新たな要素として以下の点が挙げられよう。

- ① 実父は亡く、その弟に育てられ、妹とは腹違いである
- ② 舞台を大阪から江戸へ換え、逃走の地をその逆に設定している
- ③ あらぬ嫌疑をかけられる
- ④ 恩人を庇うべく罪を被らうとする
- ⑤ 真犯人へも心遣いを欠かさない
- ⑥ 恩人の娘と夫婦になる
- ⑦ 病の床の菌がゆい日々を経て、妹搜索の旅を義父と妻とで行く
- ⑧ 一度目の搜索は一足違いで行き違いに終わる
- ⑨ 店を再興するものの、なかなか成功しない
- ⑩ 二度目の搜索は単身でなされ、その足取りを具体的に描写し

ている

⑪途中で御用商人と親しくなる

⑫父の墓の前で自殺せんとする妹と遭遇する

⑬御用商人が実母の弟を伴い来る

⑭その全面的な協力により、将来が保障される

①は妹に対する忠告を父にすると、娘の方を可愛らしく思い退けられるという状況を、義理の親子と実の娘という構図に改めることにより、より現実味のある場面になっているといえよう。②は実は⑩と関係するはずであるが、取り敢えず大阪の新聞の連載を東京の雑誌に転載するためになされた操作としておく。③は主人公を窮地に追い込み作品の一つの山場とする工夫で、④と⑤は、無論、彼の善良性を強調するためである。⑥は尽くした女性が妻となるという定型ではあるが、放蕩お梅の対極に位置する女性を配そうとした結果である。それは書名によって明らかである。原摺の角書は「梅菊」とあり毒婦と遊び人という例の『鳥追阿松』の型を意識したものである。対して藍泉は「梅柳」と改め、放蕩の妹と自己犠牲を代償に相手を救ったお柳とを対比的に並べたのである。⑦から⑧はより劇的に筋を展開する工夫で、山場の形成を意図したものである。これは⑫そして⑬にも当てはまり、⑬の布石となるのが⑪である。ここで問題となってくるのが⑨である。原摺ではたやすく成功を与えていた。なかなか成功しないが、やがて創意工夫などで立身するというなら、喜びを大きくする工夫といえよう。実際「松之花娘庭訓」でも藍泉は奮励努力の末に財をなし妻を、そして母を大切に主人公を描いていた。しかし

今回に限って⑭の如くに、全くの他力本願による結束を用意したのである。此処で問題となってくるのが⑩である。何ゆえ足取りが具体的に書かれなければならないかつたのであろうか。妻と義父を伴う一度目の帰京にあたる⑦は、以下の程度の記述にすぎない。

清三郎は東京見物かた／＼に得蔵お柳も引連て、東海道へ上り来り。故の住居の浅草なる町役人や同業の者にたよりて……

対して⑩は次の如くである。

二月初旬神戸より横浜通ひの蒸気船広島丸に乗組しに……清三郎は其日の午前汽車にて府下へ来て見れば、昔年に異る京橋の通りは煉瓦建並び眼を驚かすことのみなれど

確かに時代の風物を並べたに過ぎないのかもしれない。しかし藍泉自身つい数ヶ月前、蒸気船で大阪を發ち、神戸を経て帰京の途についたのである。

ここで藍泉の下阪から帰京までを重ねてみよう。読売新聞社を退社後、先取りし過ぎた夕刊事業に破れ失意の末広島丸で横浜を發ち、神戸を経て着阪するのが、四月十二日である。この報は大阪のみならず、東京でも大手の「かなよみ」によってなされている。⑬「大阪」新聞へ招聘しようという友人宇田川文海の温かい心遣いがあった。しかし四、五日目は病の床へ伏せざるを得なくなり、文海の期待に応えられない半月を送る。病癒えた藍泉は、五月の下旬から博覧会の取材のため、京都へ赴く。文海が所属する「大阪」の親会社にあたる「大坂日報」記者山脇巍も同行して

いる。六月早々には帰阪し、小新聞の普及団体広演社で演説したり、創刊する新聞へ祝辞を寄せたり、追善会のゲストを務めたりしながら、『鉄道ばなし』の原稿を執筆する。この作は帰京後間もなく、大阪書肆前川源七郎より活字版で刊行されている⁽⁴⁾。下旬には「五月雨物語」を連載、これを置き土産に七月二日西京丸で大阪を出帆した。この船旅は、兵庫県少書記官原安太郎と「大坂日報」社主西川甫が同行する。神戸で数日過ごした後來阪時同様横浜経由で、中旬に東京へ到着したのであった⁽⁵⁾。

上方と東京を結ぶに際し、蒸気船という手段、横浜・神戸という港が一致している。加えて船中の御用商人とその背後にいる役人という組み合わせも、新聞社の経営者と役人の同道とそれほど飛躍してはいない。更に清三郎の一度目の上京が病の後で、同伴者がいるという点は、藍泉の京都出張の状況と重なってくる。清三郎は店の金を使い込み、上方へ落ちてきた。藍泉も事業に失敗し、大阪に下ってきた。そして清三郎は得蔵という恩人に邂逅する。藍泉も友人文海の心遣いで失意を癒すことができた。加えて連載の持つ商品価値を学び、帰京後になされた自作の単行本化により活字本が持つ合理性をまざまざと認識できた。上京のきつかけは「曙」新聞からの勧誘であった。藍泉は親友の掛け替えのなさ、並びに新たな就職先から声を掛けてもらえる有り難さを痛感したことであろう。その体験こそが、⑭の他力本願の成功という結末を用意させたのである。清三郎という主人公に大きな創作を施したのは、自らの大きな挫折とその克服の経験が生々しく残っていたからに違いない。

前述の如く、藍泉にとつての連載第一作「五月雨物語」には粉本があった。それを連載という形式にアレンジすれば事は足りたのである。同時に連載のコツを掴むという訓練の場にもなった。しかし、ただそれだけでは満足しきれない思いが残ったのではあるまいか。第二作の「梅柳新話」も連載当初は典拠との距離が接近しており、「五月雨物語」と同様の執筆姿勢であった。しかし間もなく主人公に己の体験を重ねていこうとする欲求が急激に湧き出したのだと思う。これを写真と呼びうるか否かは慎重な判断が必要である。少なくとも藍泉自身はそのような文学態度は持ち合わせてはいなかったであろう。また作品全体を通してみれば、写真といえる箇所は決して多くはないであろう。しかし少なくとも、他人の事件を興味本位に追跡し、教訓を添えて物語化するのとは明らかに一線を画している。とはいっても、このような試みは、藍泉にとつて必ずしも有益ではなかった。それは量産するには向いていないからである。以降は徐々になりを潜め、作家として世に立つときには完全に決別している。

さて、写真という態度が存在しない当時、作者の体験の吐露を読者もスムーズに受け取ることが果たして可能だったのであろうか。まず藍泉の動向を読者が知り得たかという点が問題になるだろう。前述の如く藍泉の行動は新聞の報ずるところであり、大阪はもちろん東京でもその記事の存在が確認できた。従って藍泉の動向に関心を持っていた読者のながしかは、作品と体験の接近を認識したとしても不思議はあるまい。

いまひとつ、背景にある、記事に対する認識の深化という要因

も間接的には関係していると思われる。幕末から維新时期という未曾有の変革期があった。続けて舞台をその時期に設定した大衆向けの戦記文学が登場する。松村春輔の『復古夢物語』がその先陣を切った。歴史の表舞台のみならず、名もなき烈婦達の激しくも切ない生涯を綴る『春雨文庫』が、やはり春輔によって送り出された。一方小新聞においても、つづきものの祖とされた「岩田十八の話」が登場し、描くべき階層の拡散化をみる。変革期を生き抜く市井の男女の姿が対象となってきた。激動期を振り返るだけの余裕が、漸く生まれてきたのである。その出来事は余りにも強烈なものであり、それゆえに誰しもが共感し得る素材であった。

ところがその商品価値は、思わぬ事件の勃発によって忽ち一顧だにされぬという状況に追いやられてしまう。西南戦争である。大小を問わず、新聞という新聞はこぞって戦報記事を競うこととなった。記事の内容が直接売れ行きを左右したのである。多くの読者は初めて新聞という媒体に魅力を強く感じた。八ヶ月に及ぶ戦いの末西郷隆盛は戦死し、間もなくその死を巡る状況や生存説などではもはや読者引き止めるだけの商品価値を喪失してしまふ。しかし、西南戦争は単に激動期の生涯というテーマを中断させて、線香花火の如くに消失したのではない。それはひとつの事件に対する人々の関心をかつてないほど集中させるという効果をもたらした。そして記事というものは知りたいと思う事実を届けてくれる媒体として初めて認識されたのである。新たな商品開発に迫られたとき再び省みられたのが、激動期の生涯という題材で

あった。仮名垣魯文が手がけた「鳥追お松」は、やがて毒婦という色彩を濃渾にするに至り、単行本化に及んでは毒婦という新たなテーマに衣替えしてしまふ。⁽⁸⁾こうして例の毒婦物の大ブームへと向かっていく。一方大阪の宇田川文海は、ものによつては毒婦的な色彩を添えるものの、激動期の生涯というテーマを主にした連載を特色とした。藍泉は毒婦物と対抗するべく文海の路線を発展させたのである。こうして記事とは事実を基にして、人の生き様も語られている存在という認識が定着してきつつあったのではないだろうか。

冒頭でも確認したように、興津氏は「梅柳新話」を必ずしも高く評価してはいなかった。しかし藍泉にとって粉本に色をつけた程度の軽いものではなく、むしろ意欲的な試みがなされていたとすべきである。

二 連載と単行本を巡って

「梅柳新話」が単行本化されたのは明治十三年十二月のことである。連載の完結は前年の十二年一月とされ、ほぼ二年を要している。版元愛善社は「芳譚雑誌」社内出版部門を作るべく置かれた。「梅柳新話」に続く連載の第二作目「巷説兇手柏」は、十二年五月の完結から四ヶ月後に文永堂から届がなされ刊行された。第三作目もやはり同年八月の完結から四ヶ月後に、具足屋によつて届がなされ「松之花娘庭訓」と改題して刊行された。三作いずれも表紙を摺付で飾り、序も木版で口絵が続き、本文のみ活字版という体裁である。何ゆえ「梅柳新話」はそれほど単行本化

に時間を要したのであろう。もし単行本に値し難い出来栄であつたなら、自前の出版部門の第一作にはしないはずである。前章に述べた如く藍泉にとつて自らの体験を重ねた実験的な作品であり、むしろ自社用に取っておくほど愛着があつたのではないか。第二作目に文永堂が単行本化を申し入れたということは、第一作目の成功があつたからに他ならない。しかし十三年十二月とは前編上下二冊の刊行された時期であり、後編上下二冊は序の年記が十四年の春で、刊行が同年も押し迫つた十二月の末である。これは時間がかかり過ぎている。たとえば「巷説兎手拍」は初編と二編の時間差が三ヶ月ほどである。「梅柳春雨譚」は連載されてから時間が経っており、売れ行きが芳しくなかつたという可能性も考えられるが、自社内制作ゆえ打ち切るならそれは容易にできたであらう。従つて特に二編は序がものされて以降も、何がしの操作や作業が施されていた可能性が濃厚ということになるだらう。

以上の点を追求するべく、連載と単行本との本文比較から始めよう。連載第一号の冒頭は、「鳥追阿松海上新話」の冒頭をそのまま引いたものである。「梅柳新話」に先立つ連載「五月雨物語」においても、最終回に以下の如くに記している。

記者藍泉曰す、五月雨の長物語を……案牘て仮名読新聞の鳥追お松海上新話の例に倣ひ僕が著述の鉄道^{かみみち}ばなしの後篇には此五月雨を記やうにと……

従つて藍泉は「鳥追阿松」を相当意識していたことが分かる。しかしここでは毒婦物という作風への対抗意識よりも、連載經由の

単行本で大当たりしたもののという側面の方であらう。半年以上も前の作でありながら、その驚異的な売れ行きは鮮明な記憶として残つていたはずである。また「五月雨」「梅柳」ともに記す如く、当時の藍泉はつづきものとはせず、長物語と呼んでいた点もつづきものという呼称を巡る問題提起する際注意を要するであらう。

対して単行本化された「梅柳春雨譚」の冒頭である前篇上の巻第一回は、「鳥追阿松」の本文が全く姿を消している。それはものされた時間差のためである。単行本は連載から二年の歳月を経ている。もはや「鳥追阿松」でもあるまい。それに替わつて因果応報めかした教訓の一文を置く。このような書き換えは、連載から単行本化するにあたつては当然なざるべきものであらう。それに類する書き改めもいくつか指摘できる。各連載の終りは次回への期待を持たせるべく、予告めいた言葉で綴られる場合が多い。単行本化に当つては、そのような結びは不必要となる。連載において、これまでの内容を要約するかのとき書き出しも、同様にすつきりとした文脈に整理される。無論字句や表現を推敲するケースもある。更に誤植の類で次回に訂正されたものも、単行本化に際しては本文を正し訂正記事は削除される。

以上のような時間差によつたり表面的な理由による書き改め以外にも、本作には顕著な改変が発見できる。それは本文の一塊を惜しげもなく削除するという操作である。二箇所ほど例示してみよう。連載第四号で、清三郎が京都広沢に落ち行きかつての奉公人の得蔵に救われる場面で、得蔵が清三郎の身元を知り再会を喜

ぶ台詞において、「門口で吹く笛の……坊様のことを思ひだし」という百二十字分が、単行本化において丸々省略されている。ここは昔の主人、即ち先代である清三郎の実父によく似ているから判ったという内容で、得藏の清三郎に寄せる親愛の情が印象付けられる箇所であろう。筋を語るに急であればカットされやすい所といえようか。今ひとつの例は省略の規模が更に大きい箇所である。連載第十二号で、伝右衛門の妾となつたお梅が、夕食後日本橋通りへ一緒に散歩し帰宅する場面で「日本橋の通りへ出て……拍子木カチ／＼カ、チ」の三百字弱が単行本では綺麗にカットされている。ここは下女が揚助尾行に感づくという一条である。これに続くお梅と揚助の腐れ縁の復活は、単行本では惜しげもなく間引きされる。第十三号はお梅と揚助の再会までが前半、再会後初の密会現場が後半で、後半の七百七十字ほどが全て省略、続く第十四号はお梅と揚助の放埒な生活ぶりから外国人の妾に転落するまでで、本文はほとんどカットされ、筋が拾われているに過ぎない。連載では語られていた毒婦的な要素と恋の情の描写を単行本化に際しカットしたのである。要するに各篇上下二冊各十丁という構成に収めるための、止む無き処置と考えた方がよいであろう。但し藍泉という作家は、そのような点に目をつぶるのには殆ど抵抗を感じてはいないのである。加えて男主人公の清三郎をより引き立たせるため、女主人公お梅の活躍を大きく削つたという可能性も考えられる。

ここで各編各巻に収められた場面と連載との対応関係を示そう。①⑤は連載の号数を示す。複数回に数字が跨っているの

は、連載の途中までしか収められていないケースである。

前篇 上 第一回①、② 第二回③、④ 丁数十

下 第三回④、⑤ 第四回⑤、⑥ 第五回⑦、⑧ 丁数十

後篇 上 第一回⑨、⑩、⑪ 第二回⑫、⑬、⑭ 丁数十

下 第三回⑮： 第四回 第五回 丁数十

十六回以降は未見ではあるが、前篇は大体連載二回ずつのペースで均等割りの配分になっている。対して後篇は連載三回ずつの配分ではあるが、上巻第二回は前述の如くお梅の動向を中心に、大幅に本文をカットしていたし、下巻は未詳の要素が多いものの十丁という定型に収めることがかなわず、二丁の超過に及んでいる。既に連載されたもののある定型に収めて単行本化しようとする、最終巻に不均衡が生ずるのは止むを得ない。『巷説兎手柏』は、やはり初・二編各上下巻二冊で各十丁ながら、二編下のみ九丁であった。しかし二丁の超過はやはり目に付く数であろう。前篇編集時では、各回に二本ずつの連載を収めるという大原則で、さほどの問題もなく完成し、後篇もこの調子でいけると高を括っていたのではないのだろうか。

ここで前篇と後篇の刊行される期間の異常な長さが関係してくる。後篇の自序は明治十四年春の年記があり、前篇の刊行からそれほど間もない時期になされたことがわかる。ところがその自序には次のような言い訳がましい文言が見られる。

……さゝ波の打寄る程。繁き机の夜業に。後編の稿を果し。

印刷所へ授る迄は。生酔の唄ふ大津絵節より。長たらしくて間に合兼るを。看客さぞや俟侘たまはん。

時間の超過を咎めていることは確実である。前年十二月に初編を刊行し、翌年春に後篇の原稿が完成しているのなら、これほどまでに卑屈になる必要もあるまい。更にこの後篇の刊行は春からは一年近く先の十二月二十六日のことである。春という年記を持った序を備えているのは不自然であろう。しかし遅れて誠に申し訳ないという内容は、刊行の遅延という実態にびつたりと一致している。恐らく藍泉は春には一応の恰好を付けたものを用意していたのであろう。しかしそれは長すぎる、あるいはテーマが拡散している等色々の問題を抱えていたのだと思う。従つてこれからも取捨選択を、そして推敲を繰り返さねばならぬと予期していたことであろう。また本文をカットすれば、当然連載に伴つていた挿絵の置き場所も工夫を強いられる。単行本の挿絵は連載のものを流用しているものが殆どだが（連載第二号のみ使われず、その順番はアトランダムで余白に合う挿絵を入れたとしか思えないものも多い。決して連載の本文活字と挿絵をそのまま転がしたものだではない。実際それから数ヶ月を費やして、お梅の遊蕩の行動をカットする決断を下す。初篇序文の勤徳という意図が十分表現されないという印象を与えたのは、この予定外の作業によるものであった。一方その結果として清三郎を浮き立たせ、自らの苦渋に満ちた、そして他人の有り難味を知った体験を投影させる場面はカットすることなく、二丁の超過も止むなしとして校了とした。連載の単行本化という手間のかかりそうでもない作業から発して、遅れに遅れた果てのことであった。

いくら連載の本文がそこにあり、自前の版元から上梓できるよ

うになったとしても、単行本化に伴う労力がこのように大きいなら、流行作家となり多忙な藍泉にとつてそれは許容されることではない。諸悪の根源は何か。それが形骸化しつつ残されてきた五丁一卷という草双紙の定型であった。『梅柳春雨譚』に続く単行本『岡山紀聞筆之命毛』は明治十五年四月の刊行で、合巻以来の分冊形式を一新し、全五十九丁一冊という画期的な体裁を備えている。前田愛氏は『近代読者の成立』において、表紙や口絵の節約された制作費の安価さのみを強調している。しかし制作費の問題以上に、労力を回避しようとする藍泉の態度を問題にするべきである。明治十四年春『梅柳春雨譚』後篇の序がなされ、その数ヶ月後の四月に『岡山紀聞筆之命毛』の連載が始まる。連載から単行本化する際の予想以上の労力に辟易していたであろう藍泉は、当然それを回避する対策を練りつつ新連載を進めていくはずである。新連載はすでに指摘したように、これもまた大阪で既に連載された作を、粉本にしたものであった。創作時は労力が少ないのに、単行本化する際の労力が大きくなつては非効率この上ない。もつとも簡単な方法である、本文も挿絵もそっくりそのままを念頭に置きつつ、連載は進められた。こうして赤本以来の五丁一卷という呪縛を完全に脱し得た一冊本に結実する。書き改めないことを前提にして行なわれた連載の嚆矢でもあろう。当時の藍泉は柳亭種彦を襲名し、職業作家として生きていく選択を下した時期でもある。量産体制を推進するべく、書き直し等の面倒な労力を一切排除する必要がこれまでにあった。当時の多忙な藍泉、いや種彦の状況は興津氏の前掲著書に詳しい。加えて東京と大阪

を繋ぐ活動までこなしている。⁽¹²⁾しかしそれはおのれの体験を作品に投影するという試みから、完全に離れることもまた意味していたのである。

本文引用に際しては、句読点を補い、ルビは努めて省略した。

注(1) 「藍泉と大阪——作家への道——」〔文学論叢〕19、平成14・

3、徳島文理大学

(2) 「つづきもの論序説——「大阪」新聞・「大阪日報」を中心に

——」〔言語文化と地域〕、平成13・3、徳島文理大学

(3) 「かなよみ」明治十一年四月十五日付け雑報欄に、以下の記事が掲載される。

前の毎夕新聞の社長高島藍泉さんは、休業の後久しく徒然で居られましたが今度大阪日報の編輯に雇はれ、一昨朝横浜から郵船に乗込阪地をさして赴かれました。(本文引用は「復刻版名読新聞」による)

来阪の日付にも問題があり、また「大阪日報」は「大阪」の誤りと思われる。一方、東京の幸堂得知は「大阪」四月二十日付けの投書欄に「友人藍泉へ送る唄」と題して、「横浜やその浦船を漕出して……はや神戸にぞ着にけり」とその足どりを示している。

(4) 「鉄道はなし」刊行の経緯は、拙稿「明治の草双紙——京阪活版小説を中心に——」〔近世文芸〕66、平成9・7に紹介し、更

に注(1)の拙稿で補説している。

(5) 藍泉の帰京の足どりは、注(1)の拙稿で具体的に示してある。同行者の氏名、及び一旦寄留の状況は、全て「大阪」と「大坂日報」の記事に基づいている。

(6) 「五月雨物語」の分析は、注(1)の拙稿にて試みている。

(7) 拙稿「西南戦争と草双紙——『鳥追阿松海上新話』の出現をめぐって——」〔近世文芸〕69、平成11・1にて考察している。

(8) 拙稿「『鳥追阿松海上新話』の成立——連載と草双紙のはざま——」〔江戸文学〕21、平成11・12に示す。

(9) 筆者未確認だが、前掲興津氏の著書による。

(10) 注(2)の拙稿においてつづきものなる名称の検討も行なっている。概要を記せば、この当時つづきものという用例もむろん存在するが、藍泉も仮名垣魯文も長物語と記している場合が多いのではないか。つづきものなる名称が主流になるのは、明治十六年ごろかと思われる。

(11) 注(4)の拙稿では、藍泉の代表作とされた『岡山紀聞筆之命毛』と『蝶鳥筑波裾模様』の二作の各粉本を指摘している。

(12) 注(4)の拙稿にて、藍泉の明治十五・十六年の二度目の来阪とその意義について指摘した。

「芳譚雑誌」は早稲田大学図書館柳田泉文庫蔵本を、また「梅柳春雨譚」は同本間久雄文庫蔵本を使用した。深謝いたします。